

ポスター報告 41

藤原 良太 立命館大学生存学研究所

#報告題目 共に育つ教育を進めるための戦略――千葉県における会の取り組みに注目して

#報告キーワード 共に育つ教育 千葉県 会

#報告要旨

本報告では、共に育つ教育を進める千葉県連絡会（以下、県連絡会）や、その加盟団体である地域の会がとってきた「公にする」という戦略がいかなるものであるのかを検討するものである。

この主題とするのは、県連絡会や地域の会(以下、総称として「会」)が、分離教育システムが作動し続ける日本において、教育委員会（以下、教委）や学校から、「障害児」とされる子も普通学級に就学し、通い続けるための対応を引き出してきたからだ。またその活動を、親たちが中心となり、県単位、県内の複数の市町村で行ってきたことに注目すべきだろう。

県連絡会と地域の会の構成員は重なっており、そのほとんどが親たちである。

2017年11月18日には県連絡会に結成当初から中心的に関わってきた佐藤陽一氏に、2018年2月18日には佐藤氏と、県連絡会で代表を務めた経験のある仲井真由美氏の両氏にインタビューを行った。インタビューは録音し、後に文字起こしを行っている。本報告ではインタビューから得られた情報も資料として用いる。両氏には研究の趣旨を説明し、調査への協力を承諾していただいた。知り得た情報は研究の目的のみに用いることを文書で確約し、本報告の内容の確認を依頼し、実名での公表も含めて掲載の承諾を得た。

会がとる「公にする」という戦略は、親・子の悩みや困難、また楽しさも、親・子を取り巻く人たちと共有していくことである。

会は毎年、行政が実施する就学相談とは別に、就学相談会を実施している。そこで会の側は、「普通学級に入るべきかどうか」という話はあまりしない。かわりに、普通学級への就学は制度上認められており、普通学級に通い、授業に参加するために必要な対応はなされることが伝えられている。

相談会では、他の子と同様に地域の普通学級に就学するために、就学相談・就学時健康診断の拒否が呼びかけられ、市の教育長宛の申し入れ書の見本などを用いながら、手順が説明されている。

申し入れ書は、地域の会や県連絡会と親・子との連名のものである。これによって、就学時健康診断の拒否は、単に親・子の個人的な意思によるものではなく、会としての取り組みにもなる。

申し入れ書では、親・子に対して受診の催促をしたり、入学通知の発行が遅らせることがないように求められている。これは、かつて就学相談や就学時健康診断を拒否した人たちに入学通知が届かなかつたためであるが、その際に県連絡が県教委と交渉を行うことで、「親の意思を尊重し、就学相談は強制しない」といった合意を形成しているためでもある（共に育つ教育を進める千葉県連絡会 1997: 3-4）。就学時健康診断を拒否することで、他の子と同様に1月頃に入学通知を受け取って普通学級に就学できるようになっている。

親・子は、会と共同で申し入れ書を提出したり、交渉を行うことで、これまで会が教委と形成した合意を共有し、それに則って対応を要求することができる。また、教委や学校との交渉が親だけでは困難な場合も、会の関係者も参加し、サポートすることができる。

会はず、親・子と悩みを共有する。地域の会は月に1、2回、定例会を行っており、親たちが公民館などに集まって近況を報告し合ったり、悩みを相談しあう。佐藤氏や仲井氏のような中心となる人物が相談に答えたり、同様の経験がある人物に話を振り、相談者がより身近な先輩である親の経験を聞けるようにしている。

「学校から付き添いを求められて困っている」「子どもがいじめられて困っている」など、親・子と担任との関係や教室の中といった閉じられた関係の中で起こっている問題を、まず会の関係者と親が共有できる。

そして会が親・子と共同で交渉を行うことで、その子の参加が可能となるように学校組織のあり方が編み直されたり、教委が、学校が排他的な処遇を行わないように調整する役割を担うようになっている。

問題を親・子だけで抱え込むことのないように、親・子を取り巻く人たちと共有し、問題を周囲が対応すべきものとして位置付け直している。

しかし、「公にする」のは困難の経験だけではない。インタビューにおいて佐藤氏や仲井氏は、県連絡会関係者の子が楽しそうに学校に通い、同級生と一緒に進級していているのを見て、普通学級就学を決めた親もいるという話をしてくれた。

会の取り組みや個々の親・子の経験は『千葉県の統合教育』などの会報にも蓄積されている。就学時健康診断を拒否しても不利益を被ることはないという事実や、普通学級に通

い続けているという事実を会に関わる人たちと共有できるようにし、普通学級就学を後押ししている。

[文献]

共に育つ教育を進める千葉県連絡会 1997 『そのうちぽっと』 22

